

[論 文]

皇帝マクシミリアン 1 世の墓廟構想

Der Grabmalplan Kaiser Maximilians I.

田 中 圭 子

Tanaka Keiko

序

ハプスブルク家出身の神聖ローマ皇帝マクシミリアン 1 世は、1519年 1 月12日に上オーストリアのヴェルスで没した。その亡骸は、ヴィーンを經由して彼の生地ヴィーナー・ノイシュタットに運ばれ、2 月 3 日に聖ゲオルク教会に埋葬された。

マクシミリアンは生前より、自らの墓廟となる教会を新たに建立し、これを数多くのブロンズ像で飾る計画を立てており、教会の着工には至らなかったものの、像の一部は制作されていた。しかし、結局それらの像は聖ゲオルク教会では用いられず、1563年にティロールの中心都市インスブルックに建造された宮廷教会に安置されることとなった。つまり、現在この教会でみられるマクシミリアンの「墓廟」は、未完成であり、かつ当初の計画とは相当に異なっているのである。

そこで本稿では、マクシミリアン 1 世の墓廟に関する元来の構想を明らかにし、その中で皇帝としてのマクシミリアン、あるいは帝国というテーマがいかにかに表現されようとしていたかを検討していきたい。まず第 1 章で先行研究を概括し、第 2 章では実際の制作過程を通観する。第 3 章では、史料に即してマクシミリアン時代の計画を把握し、その意義を考察する。最後に、本稿における検討結果をまとめ、今後の研究の課題と展望を述べる。

1 研究史

1883年にヴィーンで『帝室美術史収集年報』⁽¹⁾が創刊されたことは、ハプスブルク家の芸術コレクションおよびパトロネージ活動の研究の歴史において、まさに一つの画期をなした。マクシミリアン 1 世の墓廟に関する美術史的研究も、同誌に1890年に発表されたシェーンヘルモノグラフに始まる⁽²⁾。また同誌上では、ハプスブルク領内外の文書館に残る、美術に係わる各種史料のレゲスタ(目録・概要)が編纂、公表されており、その後の研究の基礎となった。したがって、主としてオーストリア出身の美術史家が、作者と制作過程に関する詳細の解明、また構想のルーツの探求と美術史上の位置づけという観点から、マクシミリアンの墓廟に関する研究を行ってきたといえる。代表的な業績は、1930年代以降のオーバーハンマー⁽³⁾、1960年代のエッティンガー⁽⁴⁾、1980年代以降のシャイ

ヒャー⁽⁵⁾による著作であろう。さらに歴史学の側から、史料研究を通じて新たな知見が加えられることもあった⁽⁶⁾。2007年には、ハプスブルク王朝史における成果として、同家の構成員の墓所を網羅的に記録したラウロによる著作が刊行された⁽⁷⁾。

その一方で、墓は、死に関する個人的な、あるいは宗教的、社会的な観念を反映するものであるため、ヨーロッパ・キリスト教世界全体における歴史的な比較考察の対象ともされてきた。例えば、墓を死に対する態度の視覚的表現とみなしたパノフスキーやコーエンの研究が、1960年代・70年代に公刊されている⁽⁸⁾。また、1980年代に、中世の貴族家門における死者の記念に関わる研究の文脈で、マクシミリアンの構想を再検討したシュミットの業績もあげておかねばならない⁽⁹⁾。

死者が国王である場合、その葬儀は、死せる身体とは別の葬儀用肖像などを通して不滅の王権が表象される場として機能したといわれる。このような議論は、1950年代のカントーロヴィチ以来、王朝の存続が王権の永続性を保証する世襲王国、例えばフランスをひとつの範型として展開されてきた⁽¹⁰⁾。だが、その成果を参照しつつ、選挙王制が確立された後期中世の帝国において、皇帝・国王の葬儀と墓所が、王朝の交代を超える永続的な帝権の表象をもちえたか、と問うことも可能であろう。1997年には、マクシミリアンの父である皇帝フリードリヒ3世の時代を中心に、君主の死と葬儀を扱った論集が発刊され⁽¹¹⁾、2000年には、マイヤーが後期中世における皇帝・国王の墓所について、体系的な叙述と通時的な比較・分析を試みている⁽¹²⁾。マクシミリアンの墓廟については、研究の進展に伴う新たな解釈と、帝国史における位置づけが、現在まさに要請されているといえよう。

2 墓廟の制作過程

インスブルックの宮廷教会内では、マクシミリアン1世の跪拝像を載せた棺墓（トゥンバ）が身廊のほぼ中央に置かれ、その周囲に彼の祖先や親族らの立像28体⁽¹³⁾が配置されている。さらに、ハプスブルク家ゆかりの聖人・聖女の小立像23体⁽¹⁴⁾、古代ローマ皇帝の胸像21体⁽¹⁵⁾も、本来はマクシミリアンの墓廟の一部となるはずであった。

それらの制作作業は、皇帝の親族のブロンズ像から開始されている。この仕事を最初に請け負ったのは、ミュンヘンの画家ギルク・ゼッセルシュライバーであり、1502年にはマクシミリアンの宮廷画家と呼ばれている。彼は1508年にインスブルックに移住し、翌夏に鉄砲鍛冶ペーター・レフラーと共同で最初の像（ポルトガル王フェルナンド）を鋳造した⁽¹⁶⁾。レフラーは人物像制作に不慣れであったため、翌年ゼッセルシュライバーは独自の工房を構えたが、彼の仕事は遅れがちであり、相応の技術をもった人材が、インスブルックの外にも求められることとなった。1513年には、ニュルンベルクの工房で、アルブレヒト・デューラーの下絵に基づく2体の像（テオドリック王、アーサー王）が鋳造されている⁽¹⁷⁾。そして1518年、ついにゼッセルシュライバーとの契約は打ち切られた。

一方、アウクスブルクでは、1509年から1517年にかけて、マクシミリアンの助言者であった人文学者コンラート・ポイティンガーの監督のもとで、古代ローマ皇帝の胸像12体が作られた⁽¹⁸⁾。計画では34体が制作されるはずであり⁽¹⁹⁾、その凶像モデルとして、ポイティンガーの所有する古代の硬貨が活用されたといわれている。

また、聖人像は全100体と計画されていたが²⁰、そのプログラムを作成したのはハプスブルク家の歴史と系譜に関する研究を行っていた学者ヤーコプ・メンネル²¹、下絵を描いたのはインスブルックの宮廷画家イェルク・ケルデラーであった。やはりインスブルックで仕事をしていたシュテファン・ゴドルが鋳造を担当し、1517年までに19体が完成している²²。ゼッセルシュライバーが去った後、彼の任務を引き継いだのもゴドルであり、ケルデラーらの提供した下絵に基づいて、1534年に亡くなるまでの間に、マクシミリアンの祖先や親族の像17体を制作している。

だが、皇帝の生前にブロンズ像すべてが完成し、墓廟教会が着工される見通しはほとんどなかった。1514年に作成されたマクシミリアンの遺言は、その抜粋のみが現存しているが²³、ここでは、墓廟の完成まではヴィーナー・ノイシュタットの王宮礼拝堂（聖ゲオルク教会）に亡骸を埋葬するよう指示されている²⁴。そしてマクシミリアンが亡くなる約2週間前、1518年12月30日の深夜に病床で口述された最後の意志は、秘書官ハンス・フィンスターヴァルターの筆記により全文が伝えられているが²⁵、これによると埋葬場所はやはりヴィーナー・ノイシュタットの聖ゲオルク教会とされ、すでに完成した像も同じ場所に置くよう望まれるとともに、計画された墓廟の建立は、後継者である孫たちに委ねられているのである²⁶。

オーストリアの統治者となった孫フェルディナント1世は、1527年に作業の進行状況に関する報告を求め²⁷、その翌年には彼の命を受けたケルデラーが、ブロンズ像を設置する教会の調査を行い、配置案も作成している²⁸。マクシミリアンの祖先像鋳造を担当したゴドルも制作を続け、1534年に死去するまでの間に計17体を制作した。その後中断した作業を再開させる契機となったのは、マクシミリアンの遺言執行人の一人であったヴィルヘルム・シュルフが1547年に行った提言であった²⁹。未完成であった祖先像10体分の下絵が画家クリストフ・アンベルガーに依頼され³⁰、最初の像を手がけたペーター・レフラーの息子、グレゴールの工房で1550年にクローヴィス像が鋳造されたが、結局これが最後に完成した像となった。

墓廟の場所については論議が続いていたが、インスブルックに新たな教会を建立することで決着した。着工は1553年、落成は1563年2月14日である。教会内に置かれる棺墓の構想立案は1550年代後半に開始された。マクシミリアンの勝利を表す24場面のレリーフで側面を飾った棺墓は1566年に³¹、その上面に載せられるマクシミリアンの跪拝像は1583年に完成した³²。また、大理石製の棺墓を保護するための鉄柵が周囲に立てられることとなり、その仕上げが終了したのは1589年であった³³。

なお、フェルディナント1世と、その息子である大公フェルディナント2世は、インスブルックの宮廷教会へのマクシミリアンの移葬を願い、教皇の許可を得るための折衝と準備作業をすすめていたが、オーストリアにおけるプロテスタンティズムの浸透と財政難のため、実現することなく終わった³⁴。したがって、宮廷教会の棺墓には、マクシミリアン自身が葬られることのないまま、現在に至っている。

3 マクシミリアン1世による構想

(1) 墓廟教会と救貧院の創設

マクシミリアンが墓廟教会を建立させようとした場所は、長らく明らかではなかった。彼は1512年に教会の壁画プログラムを口述し、秘書官マルクス・トライツザウアヴァインに筆記させているが、そこでは具体的な地名は述べられていない⁽³⁵⁾。1514年の遺言抜粋には、「モントゼーの墓廟」への言及がみられ⁽³⁶⁾、また彼自身が1506年から1518年の間に3度、モントゼーに近いヴォルフガング湖を訪れていることなどから、教会予定地はこの湖の周辺と推測されてきた⁽³⁷⁾。その探索に解答を与えたのは、皇帝の死を伝える同時代の記事⁽³⁸⁾の中に「墓廟をファルケンシュタインの上に建設する」皇帝の意向についての記述が見出されたことであった⁽³⁹⁾。

ファルケンシュタインは、ヴォルフガング湖北岸に切り立つ岩山で、聖ヴォルフガング巡礼教会から約2km北西に位置し、山上の台地に巡礼路が通っているという。マクシミリアンがこの地を選んだ理由は知られていないが、当時ハプスブルク家の世襲領内でもっとも知られた聖人の一人であった聖ヴォルフガングへの信仰を利用し、巡礼者を自身の墓廟へも引き寄せる意図があったのではないかと推測されている⁽⁴⁰⁾。

また、死者の救霊と記念を保障するための配慮も、忘れられてはいなかった。マクシミリアンは、1514年の遺言において、墓廟教会で務めを果たすべき人員の配置に関する具体的な指示を行っている。24名の少年が昼夜交代で詩篇を歌い、4名の司祭がミサを行い、教会を守護する聖ゲオルク騎士団員16名が年に3度秘蹟を授けられなければならない、料理人や門番など種々の業務を行う人々も必要と述べられている⁽⁴¹⁾。聖ゲオルク騎士団は、皇帝フリードリヒ3世によって1468年以前に創立され、ハプスブルク世襲領内のミルシュタット、次いでヴィーナー・ノイシュタットを拠点とした組織である。マクシミリアンは、おそらくはブルゴーニュの騎士団の影響のもとで、この騎士団を対トルコ十字軍の戦いを支える兵力として位置づけ、拡大と再活性化を図っており、さらに皇帝戴冠を目指すローマ征行に従う軍勢としての役割も与えようとしていた⁽⁴²⁾。その一方で、墓廟を維持する務めもまた、この騎士団に委ねられたのであり、上述の遺言の中には、騎士団の組織と財源についての指示も含まれている⁽⁴³⁾。同時にマクシミリアンは、「聖ゲオルギウスの赤い十字のついた白いダマスク織り」に包まれて納棺されることを望んでおり⁽⁴⁴⁾、彼の墓廟構想と聖ゲオルギウス、その名をいただいた騎士団との結びつきの深さが窺われる。

さらにマクシミリアンは、墓廟教会のみならず複数の救貧院の創設をも遺言している。その場所は必ずしも一定せず、1514年には9か所、1518年には8か所の地名があげられたが、双方に共通するのはヴィーン、インスブルック、グラーツ、アウクスブルクである。そして、これらをつなぐ軸からアドリア海に向かって連なるケルンテンやクライン、また北西のネーデルラントに至る諸地域の都市が加えられている⁽⁴⁵⁾。1518年の遺言では、財源と貧者への対応が詳細に述べられた後、各救貧院にマクシミリアンの像を置き、その前でミサを挙行しヨハネによる福音書を読み上げるよう、そして「神を讃え、聖なる騎士である聖ゲオルギウスを敬うために、そして余の幸いなる記念のために、光が灯される」よう求めている⁽⁴⁶⁾。

つまり、マクシミリアンの構想において墓廟教会と救貧院の創設は一体をなしており、その目的は、中世以来の伝統に従った救霊のための祈禱と記念であったといえる。ただし、そのための場と聖ヴォルフガングの巡礼地の重ね合わせ、聖ゲオルク騎士団を通じた聖ゲオルギウスとの結び付き⁴⁷⁾、自らの像を飾った救貧院の配置によって、聖人たちへの崇敬を自身の記念に吸収しうる仕掛けが施されていることが見て取られよう。実現こそしなかったが、ハプスブルク領のほぼ全域にわたる記念のネットワークを構築しようとするアイディアではあった。

(2) 墓廟教会の壁画

墓廟教会の建築プランに関して知られている事柄はほとんどないが、内部の壁画については、1512年にマクシミリアンが口述したプログラムと⁴⁸⁾、これと同時期にケルデラーが制作したと推測される彩色素描⁴⁹⁾によって、計画の内容が伝えられている。

この素描に描かれているのは教会の内陣といわれるが、描写に即して記述すると、八角形平面のうち3辺をなす壁に囲まれた空間ということになる。ただし、その手前は画面内に入っていないため、空間が実際に八角形であるかどうかを確認することはできない⁵⁰⁾。窓がなく、全面が壁画で埋められているのは、通常の教会建築ではなく墓廟として構想されたためと考えられている⁵¹⁾。縦長の3つの壁面は、それぞれ7つの画面に区切られており、その上にやや複雑なヴォールト構造をもつ天井がかかっている。口述された図像プログラムによると、向かって左側（紋章学上の右側）の壁面は「永遠の信仰」を主題とし、7つの救貧院の創設を表すものである。7つの画面のそれぞれには、聖人または聖女と、その両側に跪いて崇敬を捧げる男女の姿が描かれる⁵²⁾。中央は「人生の信仰」と題され、巡礼の姿やキリスト教的徳目を表す7場面から構成される⁵³⁾。右側（紋章学上の左側）の壁面には、「貴重なる信仰」として、聖ゲオルク騎士団の7支部を表す騎士たちが登場する⁵⁴⁾。

その中で中央最下段に位置する一人の巡礼の図については、聖ヴォルフガング巡礼と結び付けて説明しようとする見解がある⁵⁵⁾。だが、それだけではなく、図像プログラムにおいて、灰色の衣服をまとった巡礼は「金の冠をのせた黒い巡礼杖を手に持つ⁵⁶⁾」と述べられている点にも注目する必要があるだろう。金と黒は、金地に黒い鷲を描いた帝国の紋章の色であり、それゆえ帝国を象徴する色彩でもある。また、冠は支配権や支配者の象徴であるため、ここでは帝国の皇帝を示す役割をもっていると考えられる。マクシミリアンは、ローマ教皇による皇帝戴冠を経ずして皇帝称号を帯びるという宣言を1508年2月4日にトリエント大聖堂で行っているが、その前日にトリエントに入城する際、側近たちとともに杖を手にした巡礼姿で現れたと伝えられている⁵⁷⁾。したがって、墓廟の壁画に描かれるはずであった、金の冠で飾られた黒い杖をもつ巡礼は、皇帝マクシミリアンに他ならない、とみなすことができよう。

さらに、この壁画には帝国の紋章自体も表されなければならなかった。素描では、ヴォールト天井の中央に双頭の鷲の紋章、その両側にマクシミリアン個人が用いていたオーストリアとブルゴーニュの紋章がみられる⁵⁸⁾。口述プログラムによれば、左右の壁面の14場面それぞれにも、帝国の紋章とオーストリアとブルゴーニュの組み合わせ紋章を描

き込まねばならず、素描でも忠実にその指示が守られている。また、この図では、聖ゲオルギウスの十字の色であるとともにオーストリアの紋章の色でもある赤と白、そして帝国の紋章の色である黒を用いて着彩され、紋章がより強調された表現になっている。

(3) 皇帝像と祖先・親族の像

インスブルックの宮廷教会には、マクシミリアンの跪拝像を載せた棺墓が置かれているが、このような墓が当初からマクシミリアンの構想に含まれていたか、という問題は、研究史上の論点のひとつであった⁶⁹。しかし、墓所や救貧院設立に言及している2つの遺言中には、棺墓に係わる具体的な指示はみられない⁶⁰。むしろマクシミリアン自身は、特別な棺墓や墓碑は設けず、祭壇下に納棺されることを望んだと伝えられ⁶¹、ヴィーナー・ノイシュタットの聖ゲオルク教会では、その通りに埋葬されている⁶²。教会内に棺墓を配置するアイデアは、おそらくフェルディナント1世により持ち込まれたものであった⁶³。

しかしマクシミリアン自身の像に関しては、墓廟構想の中で一定の位置を占めていたと言うことができる。1518年の遺言では、自らの像を父フリードリヒ3世、カール大帝、その他2体の像とともに、教会内の最前方に置くよう指示している⁶⁴。朽ち果ててゆく肉体は、謙虚にも、祭壇でミサを挙げる司祭の足下に葬られ、教会内においては隠されているが、皇帝マクシミリアンの似姿は、ブロンズ像によって永遠化され、墓廟の中心をなす存在とならねばならなかったのである。さらに、マクシミリアン像の側近くに置かれる4体の像に続くように、その他の祖先や親族の立像も4列に配置される計画であったと考えられている⁶⁵。

これらの像は、前述の通り28体が現存しているが、構想の段階ではおそらく40体が制作されるはずであった。作業が進行する過程の中で作成された、完成した像のリストや報告書など⁶⁶を照合することにより、ブロンズ像40体の人物名がほぼ明らかになる。また、ケルデラーが制作したと考えられている、全長3m余りに及ぶ羊皮紙に39名の人物像を描いた彩色素描が残されており⁶⁷、これを通じて、制作が実現しなかった像についても図像案を知ることができる。

その構想においては、血統の高貴さを強調する起源説に基づく人物と、その子孫とされたハプスブルク家の人々⁶⁸、場合によっては支配権要求の根拠ともされた親族・姻戚関係を表す人物⁶⁹、そしてキリスト教君主、皇帝、騎士の理想を体現する人物⁷⁰が選ばれ、ひとつの全体を構成しているといえる。この中にはマクシミリアンの王朝意識が強く反映しており、それゆえに主としてハプスブルク史の枠組みの中で論じられてきたといえるが、ここでは帝国に関連する要素のみを取り上げたい⁷¹。

まず、計画された40体の人物像の中には、帝国首長の地位を占めたハプスブルク家出身者は、すべて含まれている。国王ルードルフ1世（在位1273～1291年）、その息子である国王アルプレヒト1世（在位1298～1308年）、ルクセンブルク家の皇帝ジギスムントの女婿であった国王アルプレヒト2世（在位1438～1439年）、そして皇帝フリードリヒ3世（在位1440年～1493年、1452年より皇帝）の4名である⁷²。さらに彼らの后たち、ケルテン公およびゲルツ・ティロール伯マインハルトの娘にしてアルプレヒト1世の妻であったエリーザベト（1313年没）、アルプレヒト2世の妻エリーザベト（1442年没）、ポルトガ

ル王ドゥアルテの娘にしてフリードリヒ3世の妻であったレオノール（1467年没）、そしてマクシミリアン自身の最初の妻、ブルゴーニュ公女マリー（1482年没）と第二の妻、ミラノ公女ビアンカ・マリア（1510年没）が加えられている。ブロンズ像およびケルデラーによる彩色素描においては、ルードルフ1世やフリードリヒ3世の像にみられるように可能な限り肖像性を追求するのみならず⁷³、像の足元に紋章盾を置き、冠や十字架付き宝珠などの権標を添えることで、その地位が明示されている。

彩色素描では、国王である3名の紋章盾の図柄は単頭の鷲、皇帝フリードリヒ3世の図柄は双頭の鷲とされており、位の違いを単頭・双頭で表しつつも、鷲の紋章が帝国の象徴として用いられているのは明らかである。ブロンズ像では、国王3名の紋章盾は、左右に分かれた組み合わせ紋章となっているが、いずれにおいても、より上位にあたる紋章学上の右側（向かって左側）には単頭の鷲が表されている。ただしフリードリヒ3世の像については、本体とは別に鑄造された紋章盾を設置する際に異なるものが用いられたらしく、オリジナルの紋章は残っていない⁷⁴。彼らの后たちにも鷲の紋章が用いられているが、単頭・双頭の使い分けがなされているのは同様である⁷⁵。なお、彩色素描によれば、ブロンズ像として完成されることのなかったカール大帝の像にも、双頭の鷲の紋章盾が添えられるはずであった。

冠は、彩色素描をみる限り、明確に地位を差別化して示す役割をもって用いられているといえる。国王の称号をもつ人物は必ず冠とともに描かれているが、その中で、最上部に十字架を付けたアーチを伴う、ビューゲル冠と称される形式の冠を戴いた姿で描かれているのは、帝国のローマ王であった上記3名のみである⁷⁶。ブロンズ像では、制作者や制作時期の違い、細部の散逸や補作のために、必ずしも一貫した権標の表現や使い分けがなされているとはいえないが、皇帝フリードリヒ3世に対しては、彩色素描と完成した像において同じ形式の冠が用いられている。ミトラ（司教冠）に由来する要素をビューゲル冠に加えた、ミトラ冠と呼ばれる特別な冠であり、素描中で他にこれを戴くのはカール大帝のみである。皇后・王妃には称号による区別はなく、素描ではビューゲル冠⁷⁷、ブロンズ像ではアーチをもたない冠が与えられている。

また、十字架を付けた宝珠とともに表されているのは、彩色素描ではルードルフ1世、フリードリヒ3世、カール大帝、ブロンズ像ではアルプレヒト1世および2世、そしてフリードリヒ3世のみであり、他国の王にこれが用いられていることはない⁷⁸。したがって、この権標も帝国首長の地位を際立たせる役割を担っていると同時に、皇帝たちを代表する存在としてのカール大帝とハプスブルク家の国王・皇帝を、同格の存在として表現し、結びつけているといえよう。

結 語

完全な形で実現することはなかったものの、マクシミリアンの墓廟構想は、同時代において比肩しうるのは教皇ユリウス2世が計画した墓廟のみと評されるほど壮大なものであった⁷⁹。遺体に対する極めて謙虚な扱いは対照的に、ブロンズ像による自己の記念と、さらに数多くの像による家門の称揚を顕示的に行うこと、聖ゲオルク騎士団の活動や皇帝

像を設置した救貧院の創設を通して、祈禱と記念の営みを維持し拡大することが意図されていた。

そこでは、マクシミリアンの皇帝としての地位は、鷲の紋章やこれに由来する色彩、冠といった象徴によって表されていた。それらが伝えるのは、選挙侯を代表とする帝国諸侯と皇帝によって担われた、当時の帝国国制を反映したイメージではなく、古代ローマに源をもち、カール大帝が体現する帝権という、やや漠然としたイメージであろう。そこには、国王と皇帝の差異が、双頭と単頭の鷲、ミトラ冠とビューゲル冠の使い分けにより示される傾向も存在するが、これら特別な紋章と冠が、王権と帝権の重なり合う帝国の表象として機能していたことは確認されたといえよう。歴代の帝国首長の事例との比較を行い、それらの表象としての永続性を検証することは、次の段階の研究課題に属する。また、墓廟のみならず葬送儀礼においても紋章や権標がいかに用いられたかを解明し、他のヨーロッパ諸国の例を参照しつつ検討することで、支配権の表象の問題に対して寄与を行うことができると考えている。以上を研究における課題とし、本稿の結びにかえたい。

注

- (1) *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen des Allerhöchsten Kaiserhauses*. 以後、誌名を *Jb* と略記する。
- (2) David Ritter von Schönherr, “Geschichte des Grabmals Kaiser Maximilians I. und der Hofkirche zu Innsbruck”, in: *Jb*, Bd.11, 1890, S.140-268.
- (3) Vinzenz Oberhammer, *Die Bronzestandbilder des Maximiliangrabmales in der Hofkirche zu Innsbruck*, Innsbruck-Wien, 1935 (以後、*Die Bronzestandbilder* と略記する) ; id., *Die Bronzestatuen am Grabmal Maximilians I.*, Innsbruck-Wien-München, 1955.
- (4) Karl Oettinger, “Die Grabmalkonzeption Kaiser Maximilians”, in: *Zeitschrift des deutschen Vereins für Kunstwissenschaft*, Bd.19, 1965, S.170-184 (以後、“Die Grabmalkonzeption” と略記する) ; id., *Die Bildhauer Maximilians am Innsbrucker Kaisergrabmal*, Nürnberg, 1966 (以後、*Die Bildhauer* と略記する) . 1970年代には、宮廷教会全体を対象とした次の著作が刊行された。Erich Egg, *Die Hofkirche in Innsbruck*, Innsbruck, 1974.
- (5) Elisabeth Scheicher, “Das Grabmal Kaiser Maximilians I. in der Innsbrucker Hofkirche”, in: *Österreichische Kunsttopographie, Bd.XLII, Die Kunstdenkmäler der Stadt Innsbruck, Die Hofbauten*, Wien, 1986, S.359-426 (以後、“Das Grabmal” と略記する) ; id., “Kaiser Maximilian plant sein Grabmal”, in: *Jahrbuch des Kunsthistorischen Museums Wien*, Bd.1, 1999, S.81-117 (以後、“Kaiser Maximilian” と略記する) . その後の研究として、Hubertus Günther, “Kaiser Maximilian I. zeichnet den Plan für sein Mausoleum”, in: Arturo Calzona (ed.), *Il principe architetto*, Firenze, 2002, S.493-516; id., “Das Projekt Kaiser Maximilians für sein Grabmal”, in: Jean Balsamo (ed.), *Les Funérailles à la Renaissance*, Genève,

- 2002, S.77-111 (以後、“Das Projekt”と略記する)。
- (6) 例えば、宮廷教会への移葬問題や墓廟教会建設地の問題を扱った以下の研究など。
 Josef Karl Mayr, “Das Grab Kaiser Maximilians I.”, in: *Mitteilungen des Österreichischen Staatsarchivs*, Bd.3, 1950, S.467-492; Walther Brauneis, “Das Kaisergrab auf dem Bürglstein im Wolfgangland”, in: *Jahrbuch des Oberösterreichischen Musealvereines*, Bd.121, 1976, S.169-177 (以後、“Das Kaisergrab”と略記する); id., “Stift Mondsee und das Grabmalprojekt für Maximilian I.”, in: *Das Mondseeland. Geschichte und Kultur. Katalog der Ausstellung 1981 im Heimatmuseum Mondsee*, Linz, 1981, S.71-80 (以後、“Stift Mondsee”と略記する); id., “Die Grabmalpläne Kaiser Maximilians I. und der St.Georgs-Ritterorden”, in: Franz Nikolasch (hrsg. v.), *Studien zur Geschichte von Millstatt und Kärnten*, Klagenfurt, 1997, S.485-493(以後、“Die Grabmalpläne”と略記する)。
- (7) Brigitta Lauro, *Die Grabstätten der Habsburger. Kunstdenkmäler einer europäischen Dynastie*, Wien, 2007.
- (8) Erwin Panofsky, *Tomb Sculpture. Four Lectures on its Changing Aspects from Ancient Egypt to Bernini*, New York, 1964. (エルウイン・パノフスキー、若桑みどり・森田義之・森雅彦訳『墓の彫刻 死にたち向かった精神の様態』哲学書房、1996年。) Kathleen Cohen, *Metamorphosis of a Death Symbol: The Transi Tomb in the Late Middle Ages and the Renaissance*, Berkeley-Los Angeles-London, 1973. (キャスリーン・コーエン、小池寿子訳『死と墓のイコノロジー 中世後期とルネサンスにおけるトランジ墓』平凡社、1994年。) さらに1970年代半ばから死の歴史に関するアリエスの著作が出版されたことを契機に、この分野における研究が隆盛を迎えた。
 Philippe Ariès, *Essais sur l'histoire de la mort en Occident du moyen âge à nos jours*, Paris, 1975. (フィリップ・アリエス、伊藤晃・成瀬駒男訳『死と歴史 西欧中世から現代へ』みすず書房、1983年。)
- (9) Karl Schmid, “Andacht und Stift”. Zur Grabmalplanung Kaiser Maximilians I.”, in: id. / Joachim Wollasch (hrsg. v.), *Memoria: der geschichtliche Zeugniswert des liturgischen Gedenkens im Mittelalter*, München, 1984, S.750-786.
- (10) Ernst H. Kantorowicz, *The King's Two Bodies. A Study in Mediaeval Political Theology*, Princeton, 1957. (エルンスト・H・カントーロヴィチ、小林公訳『王の二つの身体 中世政治神学研究』平凡社、1992年。)
- (11) 1993年にザルツブルク大学で開催されたシンポジウムに基づく論集である。Lothar Kolmer (hrsg. v.), *Der Tod des Mächtigen. Kult und Kultur des Todes spätmittelalterlicher Herrscher*, Paderborn-München-Wien-Zürich, 1997.
- (12) Rudolf J. Meyer, *Königs- und Kaiserbegräbnisse im Spätmittelalter. Von Rudolf von Habsburg bis zu Friedrich III.*, Köln-Weimar-Wien, 2000. Meyerに対する批判的論考として、Thomas Meier, “Königs- und Kaiserbegräbnisse im Spätmittelalter. Anmerkungen zu einer verpaßten Chance”, in: *Zeitschrift für Historische Forschungen*, Bd.29, 2002, S.323-338.

- (13) 立像の高さは208～272.2cm。ほとんどがブロンズ製だが、一部では銅も用いられている。Scheicher, “Das Grabmal”, S.368ff.
- (14) 像の高さは63.2～79cm。すべてブロンズ製。Ibid., S.413ff. 現在は宮廷教会の階上廊（トリビューン）に並べられている。Lauro, *op.cit.*, S.155.
- (15) インスブルックのアンブラス城に所蔵される20体は、高さ43～51cm。制作年代によりブロンズ製と真鍮製に分かれる。Scheicher, “Das Grabmal”, S.419ff. 1体はミュンヘンのバイエルン国立博物館所蔵。
- (16) シャイヒャーによれば、構想の最初期段階では、ブロンズ像が作られるべきポルトガル王は、マクシミリアンの曾祖父にあたるジョアンであった。ゼッセルシュライバーが制作に参加した頃から、その名がフェルナンド（史料中ではドイツ語名フェルディナント）に置き換わり、そのまま定着した。Scheicher, “Kaiser Maximilian”, S.86-88.
- (17) さらに2体の像をネーデルラントで制作する交渉も行われていた。なお、「東ゴート王テオドリック」と名付けられている像は、当初の構想ではメロヴィング家の王テウデベルトであったと考えられている。Scheicher, “Das Grabmal”, S.359.
- (18) 塑像制作はアウクスブルクのイェルク・ムスカート、鑄造はハンスおよびラウクス・ツォトマンによる。1517年以降にさらに22体が作られたが、現存するのは9体のみであり、制作者は不明である。ポイティンガーについては、拙稿「コンラート・ポイティンガーとマクシミリアン1世—近世神聖ローマ帝国における一知識人の政治思想—」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』38巻、2000年、1～11頁。
- (19) Oberhammer, *Die Bronzestandbilder*, S.22f.; Egg, *op.cit.*, S.52f.
- (20) Oberhammer, *Die Bronzestandbilder*, S.321ff.; Egg, *op.cit.*, S.49ff.
- (21) メンネルの活動については、拙稿「ハプスブルク家の聖人たち—16世紀初頭の系譜学者ヤーコプ・メンネルの仕事より—」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』42巻、2004年、109～115頁。
- (22) 塑像制作はゴドル工房で働いていたレオンハルト・マート。1528年にさらに4体が鑄造された。
- (23) 墓廟、救貧院の創設、聖ゲオルク騎士団に関して述べた箇所のみが現存する。この遺言抜粋は、次の文献中に掲載されている。Mayr, *op.cit.*, S.491f.; Brauneis, “Stift Mondsee”, S.78f.; Schmid, *op.cit.*, S.772-776.
- (24) Ibid., S.773f.
- (25) 1519年1月11日に加えられた補足書も含め、次の文献中に掲載されている。Inge Wiesflecker-Friedhuber (hrsg. v.), *Quellen zur Geschichte Maximilians I. und seiner Zeit*, Darmstadt, 1996, S.289-295.
- (26) Ibid., S.289f.
- (27) *Jb*, Bd.2, 1884, Reg.1730. 1527年11月30日付、インスブルック政庁宛て文書。
- (28) 調査されたのはヴィーナー・ノイシュタットの聖ゲオルク教会と修道院教会、ウィーンの聖シュテファン大聖堂であった。配置案については、Oberhammer, *Die Bronzestandbilder*, S.34ff.

- (29) *Jb*, Bd.11, 1890, Reg.6387-6390. 1547年3月9日付、フェルディナント1世宛て報告書と添付書類。
- (30) アンベルガーによる素描7枚が現存。ヴィーン、オーストリア国立図書館所蔵。
- (31) 棺墓は高さ330cm、幅440cm、長さ640cm。レリーフの下絵はケルン出身の画家フローリアン・アーベル、制作はその兄弟ベルンハルトとアルノルトおよびメッヘルン出身のアレクサンダー・コリン。
- (32) 皇帝像の高さは167cm。下絵はフローリアン・アーベル、塑像制作はコリン、鋳造はシチリアから招聘されたルドヴィーコ・デル・ドゥーカ。
- (33) 鉄柵制作は、インスブルックの画家パウル・トラベルとプラハの宮廷錠前師ゲオルク・シュミットハンマーによる。仕上げの着彩はトラベルほか3名の画家による。
- (34) Mayr, op.cit., S.467-492.
- (35) Wien, Österreichische Nationalbibliothek (以後、ÖNBと略記する), Cod.2835.この文書では、『マクシミリアン1世の凱旋行進』の図像プログラムに続いて、墓廟壁画についてのプログラムが記録されている。後者に該当する部分は、次の文献中に掲載されている。Karl Giehlow, “Beiträge zur Entstehungsgeschichte des Gebetbuches Kaisers Maximilian I.”, in: *Jb*, Bd.20, 1899, S.101-103; Brauneis, “Stift Mondsee”, S.76-78.
- (36) Schmid, op.cit., S.773f. この遺言では、モントゼーの墓廟教会が未完成であればヴィーナー・ノイシュタットを埋葬地とするが、いずれは新たな墓廟教会に、あるいはこれが完成しなかった場合はモントゼーの修道院に移葬するよう指示されている。
- (37) Mayr, op.cit., S.470; Brauneis, “Das Kaisergrab”, S.176.
- (38) Hanna Dornik-Eger, “Hans Herzheimers “Neue Zeitung” zum Tode Kaiser Maximilians I.”, in: id., *Albrecht Dürer und die Druckgraphik für Kaiser Maximilians I.*, Wien, 1971, S.24-38.
- (39) 記事の著者は、1514年の遺言において、教会建設費用を提供するとされたアウスゼーの塩坑の管理者を務めていたハンス・ヘルツハイマーであり、周辺地域と墓廟構想に関して信頼しうる情報をもっていたと考えられている。Brauneis, “Stift Mondsee”, S.73; id., “Die Grabmalpläne”, S.488; Günther, “Das Projekt”, S.78ff.
- (40) Ibid., S.78f. 聖ヴォルフガングは、925年頃にシュヴァーベンに生まれ、レーゲンスブルク司教となった人物。皇帝オットー2世、オットー3世の相談役であり、後に列聖される皇帝ハインリヒ2世の教師でもあった。モントゼーの修道院に滞在していたことがあり、ヴォルフガング湖周辺には彼の起こした奇跡についての伝承も残されている。994年没。この聖人は、ヤーコプ・メンネルが作成したハプスブルク家の聖人暦、これに基づき制作された木版画等による連作『皇帝マクシミリアン1世の親族・姻族における諸聖人』にも登場する。ヴォルフガング湖付近は、マクシミリアンがバイエルン継承戦争を通じて獲得した土地であり、ハプスブルク家と深い関係があったとはいいがたい。しかし、マクシミリアンが結婚により相続したネーデルラントゆかりの聖人たちを、聖人暦等に積極的に取り入れていることを考え合わせると、新たな所領との結び付きを強めるための手段のひとつであったとも考えられよう。

- (41) Schmid, op.cit., S.762f., 774. これらの人数のうちに、数のシンボリズムの影響がみられるとも指摘されている。すなわち世界を構成する四元素や四方位、四福音書記者を表す4、その倍数でありキリストの復活と結び付けられる8、イスラエルの12部族や12使徒を示す12といった数に基づいた構想である可能性も考えられるのである。Scheicher, “Kaiser Maximilian”, S.105; Heinz Meyer / Rudolf Suntrup, *Lexikon der mittelalterlichen Zahlenbedeutungen*, München, 1987, Nachdruck, 1999, Sp.332ff., 565ff., 620ff.
- (42) 拙稿「マクシミリアン1世のプロパガンダと聖ゲオルギウス」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』36巻、1998年、119～133頁。
- (43) Schmid, op.cit., S.773ff.
- (44) Ibid.S.774.
- (45) 1514年の遺言に示された地名は、ツイリ、ミルシュタット、モントゼー、アントウェルペン、ヘント、1518年の遺言では、リンツ、ザンクト・ファイト、ライバッハ（リュブリャナ）、ブライザッハであった。Ibid., S.772f.; Wiesflecker-Friedhuber, op.cit., S.291.
- (46) Ibid., S.291ff.
- (47) 聖ゲオルギウスとマクシミリアンのイメージを重ね合わせて表現した図像の例もある。拙稿、前掲「マクシミリアン1世のプロパガンダと聖ゲオルギウス」、127～128頁。
- (48) 注35参照。
- (49) 羊皮紙、41×31cm。1968年にミュンヘンの美術商で発見され、ティロール州立博物館フェルディナンドウムが獲得した。修復の後、1969年にインスブルックで開催されたマクシミリアン展において、初めて展示された。*Ausstellung Maximilian I. in Innsbruck*, Innsbruck, 1969（以後、*Maximilian I.*と略記する）、Nr.251, S.64.この素描の制作年代は、シャイヒャーの推定に依拠した。Scheicher, “Kaiser Maximilian”, S.104.
- (50) 墓廟教会が八角形のプランで構想されたとするならば、8をキリストの復活のしるしとみなすシンボリズムと並んで、やはり八角形の空間をもつアーヘンの宮廷礼拝堂の影響をみることも可能かもしれない。いずれにせよ仮説の域を出ないが、カール大帝時代に建立され、中世を通じて正統な国王の戴冠場所とみなされてきたこの礼拝堂で、1486年にマクシミリアンも戴冠された経験をもつ。8と建築の関連については、Günter Bandmann, “Acht, Achteck”, in: *Lexikon der christlichen Ikonographie*, Bd.1, Rom-Freiburg-Basel-Wien, 1968, Nachdruck, 1994, Sp.40-41.
- (51) Günther, “Das Projekt”, S.80.
- (52) “Die ewig andacht”. プログラム中では、聖人と、救貧院が置かれる都市の組み合わせが示されている。聖ゲオルギウスとインスブルック、聖母とメッヘルン、聖セバスティアヌスとヴィーン、聖アンデレとラーン、聖マクシミリアヌスとグラーツ、聖レオポルトとミルシュタット、聖バルバラとローテンブルクであり、2つの遺言書に示された救貧院創設地とは若干の異同があるが、地理的な配置の方針は同様である。ÖNB, Cod.2835, fol.27r-27v.

- (53) “Die leibsandacht”. Ibid., fol.28r-29r.
- (54) “Des schatz andacht”. Ibid., fol.29v-30r.支部の所在地としてあげられている地名は、墓廟教会、インスブルック、エーバースドルフ、ラーン、ヴィーナー・ノイシュタット、フライブルク、アルトワ。
- (55) Günther, “Das Projekt”, S.80.
- (56) ÖNB, Cod.2835, fol.28r.
- (57) Hermann Wiesflecker, “Maximilian I. Kaiserproklamation zu Trient (4. Februar 1508). Das Ereignis und seine Bedeutung”, in: *Österreich und Europa. Festschrift für Hugo Hantsch zum 70. Geburtstag*, Graz-Wien-Köln, 1965, S.20f.; id., *Kaiser Maximilian I. Das Reich, Österreich und Europa an der Wende zur Neuzeit*, Bd.4, München, 1981, S.8.
- (58) マクシミリアンは、マリー・ド・ブルゴーニュとの結婚を通じてブルゴーニュの紋章も相続しており、これらを一つの盾の中に組み合わせた紋章を使用していた。
- (59) 棺墓構想が当初から存在したと想定するのは、Oettinger, “Die Grabmalkonzeption”, S.176ff. 棺墓構想はなかったとする代表的な研究は、Oberhammer, *Die Bronzestandbilder*, S.29f.; Egg, *op.cit.*, S.54; Scheicher, “Kaiser Maximilian”, S.94.
- (60) Schmid, *op.cit.*, S.773f.; Wiesflecker-Friedhuber, *op.cit.*, S.289ff.
- (61) Dornik-Eger, *op.cit.*, S.35f.
- (62) Lauro, *op.cit.*, S.95f.
- (63) *Jb*, Bd.2, 1884, Reg.1730. 1527年11月30日付、インスブルック政庁宛て文書。ここでフェルディナントは「マクシミリアン皇帝は、生前には自身の亡骸を納め、前述の鑄造された像に取り囲まれるべき墓あるいは棺を作るようお命じにならなかった」と述べ、その理由を時間不足に求めるとともに、より壮麗な、皇帝権標を身につけたマクシミリアン像を伴う棺墓を制作すべき、と自身の考えを記している。
- (64) Wiesflecker-Friedhuber, *op.cit.*, S.290. 1506/08年に用いられたマクシミリアンの備忘録において、すでに墓廟内の皇帝像への言及がみられることが指摘されている。Scheicher, “Kaiser Maximilian”, S.94. マクシミリアン像が、立像、跪拝像、臥像のいずれと考えられていたかは不明である。
- (65) Lauro, *op.cit.*, S.154. インスブルックの宮廷教会では2列に配置されているが、1528年にケルデラーが作成した3つの配置案は、いずれも4列配置である。Oberhammer, *Die Bronzestandbilder*, S.35ff.
- (66) *Jb*, Bd.2, 1884, Reg.1137, 1250. 1513年3月22日および1516年5月18日付、ゼツセルシュライバー工房で制作された像のリスト。*Jb*, Bd.3, 1885, Reg.3010, 3011. 1528年1～2月、インスブルック政庁の依頼によるゴドルとケルデラーの報告。*Jb*, Bd.11, 1891, Reg.6388, 6390. 1547年3月9日付、グレゴール・レフラーとシュルフによるブロンズ像のリスト、およびシュルフによる墓廟完成に必要な費用の見積もり。
- (67) インスブルック、アンブラス城所蔵。図版は次の文献に掲載されている。Oberhammer, *Die Bronzestandbilder*, S.42ff., Abb.11-23. 制作年代は1530年頃と推定されているが、

シャイヒャーは1512/13年の細密画『マクシミリアン1世の凱旋行進』との関連を想定している。*Maximilian I.*, Nr.606, S.164; Scheicher, “Kaiser Maximilian”, S.85. 1522/23年頃に成立したとされる、やはりケルデラーによる、紙に30名の人物を描いた彩色素描も存在する。ウィーン、オーストリア国立図書館所蔵。Schönherr, *op.cit.*, S.164-173; Oettinger, *Die Bildhauer*, S.8f., Abb.4-7; *Maximilian I.*, Nr.607, S.164; Egg, *op.cit.*, S.20f., Abb.4-5.

- (68) まず、メンネルら系譜学者によってハプスブルク家の祖先とされた人物。メロヴィング家のクローヴィス*とテウデベルト*、ハプスブルク伯オットベルト、カペー家のユグ・ル・グラン、ハプスブルク伯ラーデポト。そして9世代にわたるハプスブルク家の直系君主とその妻、娘。ハプスブルク伯アルプレヒト*、国王ルードルフ*、国王アルプレヒト1世*と妻エリーザベト*、アルプレヒト2世*、レオポルト3世*と妻ヴィリディス、エルンスト鉄公*と妻ツィムブルギス*、フリードリヒ3世*と妻レオノール、その娘クニグンデ*、マクシミリアンの妻マリー*とビアンカ・マリア*、マクシミリアンの息子フィリップ美王*と妻フアナ*、マクシミリアンの娘マルガレーテ*。さらにハプスブルク家傍系の人物。国王アルプレヒト2世*と妻エリーザベト*、その息子ラディスラウス・ポストゥムス、ティロールのフリードリヒ(「空財布」)*とジギスムント(「貨幣持ち」)*。*印を付しているのは、ブロンズ像が現存するものである。注(69)、(70)においても同様。ハプスブルク家の起源説に基づく人物同定については、Scheicher, “Kaiser Maximilian”, S.93.
- (69) ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボン*とシャルル・ル・テメレル*、ポルトガル王フェルナンド*、アラゴン王フェルナンド*、ボヘミア王オタカル、聖レオポルト*、聖イシュトヴァーンと妻ギーゼラ。
- (70) ディートリヒ・フォン・ベルン、ユリウス・カエサル、カール大帝、アーサー王*、ゴドフロワ・ド・ブイヨン*。
- (71) 美術史研究では、多くの立像を伴う墓廟のモデルについての探求も行われているが、この問題についてはここでは立ち入らない。
- (72) ルートヴィヒ・デア・バイエルの対立国王であったフリードリヒ美王(在位1314～1330年)は含まれていない。
- (73) シュパイアー大聖堂にあるルードルフの墓碑彫刻を、マクシミリアンの依頼で画家ハンス・クノーデラーが1508年に素描した図が残っている。これを資料として、ゼッセルシュライバーはルードルフのブロンズ像を制作した。*Maximilian I.*, Nr.601, S.163.
- (74) アルプレヒト2世の妻エリーザベトの紋章盾が用いられている。Scheicher, “Das Grabmal”, S.386.
- (75) ブロンズ像には、いずれも当初の計画とは異なる紋章盾が設置されているため、彩色素描の描写を参照した。女性の場合、紋章学上の右側に帝国の紋章、左側に生家の紋章を用いる組み合わせ紋章が用いられている。Ibid., S.375, 395f.
- (76) ここでは、オーストリア大公も大公帽と呼ばれるアーチを伴う特別な権標とともに描かれ、これにより国王類似の地位と主張されている。冠のタイポロジーについては、

Percy Ernst Schramm, *Herrschaftszeichen und Staatssymbolik*, 3 Bde, Stuttgart, 1954/1956. 拙稿「王権・帝権の象徴としての冠—15・16世紀神聖ローマ帝国の事例より—」『西洋史学論集』43号、2005年、39～55頁。

- (77) フリードリヒ3世の後レオノールは、1522/23年頃の素描では、ミトラ冠とともに描かれている。Oettinger, *Die Bildhauer*, S.9; *Maximilian I.*, Nr.607, S.164.
- (78) これと対照的に、笏は多くの君主たちが手にしているため、ここで特に帝国首長の地位を示す象徴物として用いられているということとはできない。
- (79) Günther, “Das Projekt”, S.94f.